班員	発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Tsukada B, Terasaki F, Shimomura H, Otsuka K, Otsuka Katashima T, Fujita S, Imanaka-Yoshida 中 Yoshida T, Hiroe		High prevalence of chronic myocarditis in dilated cardiomyopathy referred for left ventriculoplasty: expression of tenascin C as a possible marker for inflammation.	Human Pathology	40	1015-1022	2009
子	売田 食田夫 ス	冠血管の発生	細胞	41	524-527	2009
	今中恭子、 廣江道昭、 吉田利通	テネイシンC -新しいリモデリングマーカー -	医学の歩み	232	475-479	2009
	今中恭子、 吉田利通	細胞外マトリックスと炎症	血管医学	10	249-256	2009
		Downregulation of ferritin heavy chain increases labile iron pool, oxidative stress and cell death in cardiomyocytes	J Mol Cell Cardiol	46	59-66	2009
大津欣	Hikoso S, Yamaguchi O, Nakano Y, Takeda T, Omiya S, Mizote I, Taneike M, Oka T, Tamai T, Oyabu J, Uno Y, Matsumura Y, Nishida K, Suzuki K, Kogo M, Hori M,	The IkB kinase a/NF-kB signaling pathway protects the heart from hemodynamic stress mediated through the regulation of MnSOD expression,	Circ Res	105	,70-79	2009
也.	Otsu K Mizote I, Yamaguchi O, Hikoso S, Takeda T, Taneike M, Oka T, Tamai T, Oyabu J, Matsumura Y, Nishida K, Komuro I, Hori M, Otsu K	Activation of MTK1/MEKK4 Induces Cardiomyocyte Death and Heart failure	J Mol Cell Cardiol	48	283-285	2010
	Katashima T, Naruko T, Terasaki F, Fujita M, Otsuka K, Murakami S, Sato A, Hiroe M, Ikura Y, Ueda M, Ikemoto M, Kitaura Y.	Enhanced expression of the \$100A8/A9 complex	Circulation Journal	in press		2010
北	Kanzaki Y, Terasaki F, Okabe M, Otsuka K, Katashima T, Fujita S, Ito T, Kitaura Y.	Giant mitochondria in the myocardium of a patient with mitochondrial cardiomyopathy: transmission and three-dimensional scanning electron microscopy.	Circulation	16; 121	831-832	2010
泰	Otsuka K, Terasaki F, Shimomura H, Tsukada B, Horii T, Isomura T, Suma H, Shibayama Y, Kitaura Y.	Enhanced expression of the ubiquitin-proteasome system in the myocardium from patients with dilated cardiomyopathy referred for left ventriculoplasty: An immunohistochemical study with special reference to oxidative stress.	Heart and Vessels	in press		2010

班員	発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
	Ito T, Kawanishi Y, Futai R, Terasaki F, Kitaura Y.	Usefulness of carvedilol to abolish myocardial postsystolic shortening in patients with idiopathic dilated cardiomyopathy.	American Journal of Cardiology	104	1568-1573	2009
-11-	Futai R, Ito T, Kawanishi Y, Terasaki F, Kitaura Y.	Olmesartan ameliorates myocardial function independent of blood pressure control in patients with mild-to-moderate hypertention.	Heart and Vessels	24	294-300	2009
北浦 泰	Tsukada B, Terasaki F, Shimomura H, Otsuka K, Otsuka K, Katashima T, Fujita S, Imanaka-Yoshida K, Yoshida T, Hiroe M, Kitaura Y.	High prevalence of chronic myocarditis in dilated cardiomyopathy referred for left ventriculoplasty: Expression of tenascin-C as a possible marker for inflammation	Human Pathology	40	1015-1022	2009

IV. [資料]研究成果の刊行物・別冊

50 肥大型心筋症 臨床調査個人票 (1.新規)

<u> </u>		性別	1. 男2. 女			2. 大正4. 平成	/		日生 歳)		
住 所	郵便番号 電話 ()		出都道			発病時在住 都道府県				
発病 年月日	1. 昭和 年 月 日 2. 平成 (満 歳)		. 昭和 . 平成	月	日(3	呆険種別	1.政 2.組 4.共 5.国				
身体障害者 手帳	1. あり(等級級)2. なし 介	護認定 1	. 要介護(要介	護度) 2	2. 要支援					
生活状況	社会活動 (1. 就労 2. 就学 3. 家事労 日常生活 (1. 正常 2. やや不自由であ))			
受 診 状 況 (最近6ヶ月)	1. 主に入院 2. 入院と通院半々	3. 主に通	烷(/月)	4. 往記	参あり	5. 入通院な	にし 6. その他	.()		
発症と経過	(具体的に記入)						(WIS	SH 入力7	「要】		
既往歷	□ C が C)	-				
家族歷	(心疾患、突然死を中心に) □あり(□なし)		, ,			
現病歴	(1)発記時期 □6ヵ月末満 □1年末満 □5年末満 □10年末満 □10年以上前 □不明 (2)初発症状 □呼吸困難 □全身倦怠感 □胸痛・胸部五良感 □動悸 □失神 □その他 () □なし (3)現在の主症状 □呼吸困難 □全身倦怠感 □胸痛・胸部五良感 □動悸 □失神 □その他 () □なし										
検査所見	1. 身体所見 (実施日 年 月 日 加圧	□ □ c □ c □ c □ c □ c □ c □ c □ c □ c	は い い に が に が に が に が に が に が に が に が に の の の の の の の の の の の の の	あ	は は は は は は は は) □なし 					

	= 3 BHz 1 = = 3 IA + 75H=	7)	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·			
		∄)			,	
	左室造影所見 壁運動低下 口あり()	口なし 左室駅出分	画%	o ·	
	冠動脈造閉形見□正常□異常()			
	左室王 / (拡張末期王)mmHg	大動脈正	_/(平均) mnHg		
	右室王 / (拡張末期王)mullg	肺動脈王	/ (平均)mnHg		
	肺動脈製入王 millg 心拍出量 CO:CI	L/min:	L/min/m² 右房王	maHg		
	心内膜下生検 □正常					
	□異常(□心筋肥大 □錯綜配列 □その他(
				,		
	6. MRI/CT (実施日 年 月 日)		1111/ 121 0/			
	壁運動低下 口あり() [山なし 左至駅	红分	,		
	その他異常所見()		
		頦種()		
検査所見	壁運動低下 □あり() [□なし 左室駆	出分画%			
,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	その他異常所見()		
	8.運動所容能検査(実施日 年月日)					
	□正常 □異常()	peak VO ₂	m1/min/ka		
		,	peak rog	mi/ mility itg		
	9. 血液検査(実施日 年 月 日)					
	1100 / 3 DDG	$\times 10^4 / \mathrm{mm}^3$	Hbg/dl		Ht %	
	I					
	TPg/dl Alb	$_{\rm g/dl}$	AST IU/1		ALTI	
	ALP IU/1	IU/1	CK TU/1		BUN m	g/dl
	Crmg/dl UA	mg/dl	Na mEq/		KmEq.	/1
	ClmEq/l BS	mg/dl	CRPmg/d	1	BNPp	
	抗KV抗体	0		_	P	y
遺伝子診断	遺伝子診断の有無 口なし 口あり 実施日 年	月 日) 星	常遺伝子名()	
夏14丁砂树						
	① 虚血性心疾患		口できる 口でき			
	② 弁膜症・先天性心疾患		口できる	なない		
	③ 高血圧性心疾患		口できる 口でき	ない		
鑑別診断	④ 炎団生心筋疾患 (心筋炎など)		口できる 口でき	ない		
S20173 1 112 1-91	⑤ 代謝性心疾患		口できる 口でき	ない		
	⑥ 全身性心筋疾患		口できる 口でき	けない		
	⑦ 神経・筋疾患(筋ジストロフィーを含む)		口できる 口でき			
	§			•		
	⑧ 過敏性・中毒性疾患、産褥熱	`	口できる。口でき			
	1. ジギタリス(薬品名)	2. 利尿薬)
	(用量) <u> </u>		(用量)
	3. ACE阻害薬(薬品名)	4. AⅡ拮抗薬)
沙安市宏	(用量)		(用量)
治療内容	5. β遮断薬 (薬品名)	6. 血管拡張薬	(薬品名)
	(用量)		(用量)
	7. 抗不整脈薬 (薬品名)	8. カテコラミン	(薬品名	111)
	(用量)		(用量		·)
	9. その他 (非薬物治療を含む)					
)	
	当てはまる項目に印を入れてください。				•	
	- 100 0 XHICHE/WO (\ /CC / 10					
	① 心不全や不整脈治療(ICD植込みなど)によ	トススに豚たる	与一よる			
	入院の時期:昭和・平成 年 月	C STANGE C 1	1) 00			
	1	on lite (١			
	入院の理由:心不全治療、不整脈治療、そ ② 心不全の存在	の他(,			
	(②) 心不全の存在		•			
	心不全症状NYHAII 度以上かつ[(推定Mets(6以下) or (p	eak V02<20))			
	③ 突然死もしくは心不全のハイリスク因子を	_				
大項目	1) 致死性不整脈の存在	J. 17 /	•			
	2) 失神・心停止の既往					
	3)肥大型心筋症による突然死もしくは心	不全の家佐麻	を有する			
	4) 運動負荷に伴う血圧低下(血圧上昇 25m		• • •			
	5) 著明な左室肥大(最大壁厚≥30mm)		ALICA C WASTAINA)			
	6) 左室流出路圧較差が 50mmHg を超える場	晶合などの血を	子動能の高度の異常			
	7)遺伝子診断で予後不良とされる変異を		」 初心・ハロ及い共市			
	8)拡張相に移行した症例	⊓ 7 °w/				
L	- / 2-2-11-12-12-12-12-12-12-12-12-12-12-12-					

医療上の問題点						
					【WISH 入力	不要】
医療機関所在地		記載年月	月日:			
医療機関名		<u>Σ</u>	区成	年	月	日
医師の氏名	囙					
(軽快者の症状が悪化した場合のみ記載) 症状が悪化したことを医師が確認した年月日		平成	年	月	B	
特定疾患登録者証交付年月日	•	平成	年	月	日	

留意事項:①原則として6ヵ月以内の資料に基づき記入すること。

②心電図、心エコー図(実画像またはレポートのコピー。ただし、心エコー図での評価が十分に得られない場合には、CT、MRI、心筋シンチグラフィ、左室造影などでの代替も可。)を添付すること。

③可能であれば、その他画像検査、心筋生検所見のコピーも添付すること。

2009-10-01

50 肥大型心筋症 臨床調査個人票 (2. 更新)

50 がな 1 (共) 3 (共) 4 (大) 4 (大)	
1 4 π	月 日生
(A) 郵便番号 出生 発病時在住	<u></u> 歲)
発病 1. 昭和 年 月 日 初診 1. 昭和 年 月 日 保険種別 1. 政 2. 組	3. 船 6. 高
身体障害者 1. あり (等級級) 2. なし 介護認定 1. 要介護 (要介護度) 2. 要支援 3. なし	
大会活動 (1. 就労 2. 就学 3. 家事労働 4. 在宅療養 5. 入院 6. 入所 7. その他 ()) 平成 日常生活 (1. 正常 2. やや不自由であるが独力で可能 3. 制限があり部分介助 4. 全面介助) 年	
受 診 状 況 (最近 6 ヶ月) 1. 主に入院 2. 入院と通院半々 3. 主に通院(/月) 4. 往診あり 5. 入通院なし 6. その他()
前回申請時	
(1) 呼吸困難 □増蝕 □不変 □軽快 □なし 自覚症状 (2) 全身倦怠感 □増蝕 □不変 □軽快 □なし の変化 (3) 胸痛・胸部圧迫感 □増蝕 □不変 □軽快 □なし (4) 動悸 □増蝕 □不変 □軽快 □なし (5) 失神 □増蝕 □不変 □軽快 □なし (6) その他 () □増蝕 □不変 □軽快 □なし	
1. 身体所見の変化(年 月 日) □あり(
□あり() □なし 左室駅出分画 %	

	8. 運動脈溶能検査の変化 □あり(□なし	peak VO, ml/mi	n /kg	
	9. 血液検査(実施日 年 月 日)		/ 0	
検査所見	WBC/mm ³ RBC	×10 ⁴ /mm ³ Hb	g/dl	Ht %
	TPg/dl Alb	g/dl AS	T IU/1	ALT IU/1
	ALPIU/1 LDH	IU/1	(IU/1	BUNmg/dl
	Crmg/dl	mg/dl Na	u mEq/	K mEa/1
	ClmEq/1 BS	mg/dl	Pmg/dl	BNPpg/ml
	抗KV抗体		Colombia / the Co. A.	
	 ジギタリス (薬品名 (用量) 2. ^未)	利尿薬 (薬品名 (用量)
	3. ACE阻害薬(薬品名 (用量) 4. A	AII 拮抗薬 (薬品名 (用量)
治療内容	5. β 遮断薬 (薬品名 (用量) 6. I	血管拡張薬 (薬品名 (用量)
	7. 抗不整脈薬 (薬品名 (用量) 8. 3	カテコラミン(薬品名 (用量)
	9. その他 (非薬物治療を含む))
	当てはまる項目に印を入れてください。			
	① 心不全や不整脈治療(ICD植込みなど)に	よる入院歴を有する	•	
	入院の時期:昭和・平成 年 月 入院の理由:心不全治療、不整脈治療、そ	Enth (1	
	へ院の理由:心不至信景、不登脈信景、不 ② 心不全の存在	この他(,	
	心不全症状NYHAII度以上かつ[(推定Mets ③ 突然死もしくは心不全のハイリスク因子を		/02<20))	
大項目	1) 致死性不整脈の存在			
	2) 失神・心停止の既往			
	3) 肥大型心筋症による突然死もしくは心			
	4) 運動負荷に伴う血圧低下(血圧上昇 2)	5mmHg 未満;対象は4		
	5) 著明な左室肥大(最大壁厚≥30mm) 6) 左室流出路圧較差が 50mmHg を超える	堪 合たどの血行動能	□ □ □ □ □	
	7)遺伝子診断で予後不良とされる変異			
	8) 拡張相に移行した症例			
医療上の問題点	Ţ.			
	And the second s		La Carlo de Maria de Carlo de Maria de Carlo de	【WISH 入力不要】
医療機関所在地	1		記載年月日:	een Meerica and
医療機関名				. (SA to A.) 年 月 日
医師の氏名		印	TW.	

留意事項:①原則として6ヵ月以内の資料に基づき記入すること。

②心電図、心エコー図(実画像またはレポートのコピー。ただし、心エコー図での評価が十分に得られない場合には、CT、 MRI、心筋シンチグラフィ、左室造影などでの代替も可。)を添付すること。 2009-10-01

50. 肥大型心筋症

【基本病態】肥大型心筋症は、不均一な心肥大に基づく左室拡張能低下を基本病態とする疾患群である。また、拡張相肥大型心筋症は、心筋収縮不全と左室内腔の拡張が肥大型心筋症から移行した事が確認されたものをいう。

【分類】 a) 非閉塞性肥大型心筋症

- b) 閉塞性肥大型心筋症
- c) 心室中部閉塞性心筋症
- d) 心尖部肥大型心筋症
- e) 拡張相肥大型心筋症

【肥大型心筋症の診断基準】

肥大型心筋症診断における最も有用な検査は、(1)心臓超音波検査などの画像診断による所見である。(1)の検査結果に加えて、(2)高血圧性心疾患などの鑑別すべき疾患との鑑別診断を行うことは必須である。また、(3)心筋生検による所見、(4)家族性発生の確認、(5)遺伝子診断が確定診断に有用である。

おのおのの条件を以下に記載する。

- (1) 心臓超音波検査などの画像診断による下記の所見
- a) 非閉塞性肥大型心筋症 心室中隔の肥大所見、非対称性中隔肥厚(拡張期の心室中隔厚/後壁厚≥1.3) など心筋の限局 性肥大。
- b) 閉塞性肥大型心筋症 左室流出路狭窄所見、僧帽弁エコーの収縮期前方運動
- c) 心室中部閉塞性心筋症 左室中部狭窄所見
- d) 心尖部肥大型心筋症 心尖部肥大所見
- e) 拡張相肥大型心筋症 心筋収縮不全と左室内腔の拡張を認め、肥大型心筋症からの移行が確認されたもの
- (2)鑑別診断

高血圧性心疾患、心臓弁膜疾患、先天性心奇形などの除外診断

鑑別すべき疾患として、

高血圧性心疾患、心臟弁膜疾患、先天性心疾患、虚血性心疾患、内分泌性心疾患、貧血、肺性心、

さらに、特定心筋疾患(二次性心筋疾患):①アルコール性心疾患、産褥心、原発性心内膜線維弾性症、②心筋炎、③神経・筋疾患に伴う心筋疾患、④膠原病(関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、皮膚筋炎・多発筋炎、強皮症など)に伴う心筋疾患、⑤栄養性心疾患(脚気心など)、⑥代謝性疾患に伴う心筋疾患(Fabry 病、ヘモクロマトーシス、Pompe 病、Herler 症候群、Hunter症候群など)、⑦その他(アミロイドーシス、サルコイドーシスなど)

(3) 心筋生検による下記の所見

肥大心筋細胞の存在、心筋細胞の錯綜配列の存在

(4) 家族歷

家族性発生を認める

(5) 遺伝子診断

心筋 β ミオシン重鎖遺伝子、心筋トロポニン遺伝子、心筋ミオシン結合蛋白C遺伝子などの遺伝子異常

【診断のための参考事項】

- (1) 自覚症状:無症状のことも多いが、動悸、呼吸困難、胸部圧迫感、胸痛、易疲労感、浮腫な ど。めまい・失神が出現することもある。
- (2) 心電図:ST・T波異常、左室側高電位、異常Q波、脚ブロック、不整脈(上室性、心室性 頻脈性不整脈、徐脈性不整脈)など。QRS 幅の延長やR 波の減高等も伴うことがあ る。
- (3) 聴診:Ⅲ音、Ⅳ音、収縮期雑音
- (4) 生化学所見:心筋逸脱酵素 (CK やLDH 等) や心筋利尿ペプチド (ANP, proBNP) が持続的に 上昇することがある。
- (5) 心エコー図:

心室中隔の肥大、非対称性中隔肥厚(拡張期の心室中隔厚/後壁厚≥1.3)など心筋の限局性肥大。左室拡張能障害(左室流入血流速波形での拡張障害パターン、僧帽弁輪部拡張早期運動速度の低下)。

閉塞性肥大型心筋症では、僧帽弁エコーの収縮期前方運動、左室流出路狭窄を認める。 その他、左室中部狭窄、右室流出路狭窄などを呈する場合がある。

拡張相肥大型心筋症では、左室径・腔の拡大、左室駆出分画の低下、びまん性左室壁運動の 低下を認める。

ただし、心エコー図での評価が十分に得られない場合は、左室造影やMRI、CT、心筋シンチグラフィなどで代替しても可とする。

(6) 心臓カテーテル検査:

<冠動脈造影>通常冠動脈病変を認めない。

<左室造影>心室中隔、左室壁の肥厚、心尖部肥大など。

<圧測定>左室拡張末期圧上昇、左室-大動脈間圧較差 (閉塞性)、Brockenbrough現象。

- (7) 心筋生検:肥大心筋細胞、心筋細胞の錯綜配列など。
- (8) 家族歴:しばしば家族性(遺伝性)発生を示す。血液や手術材料による遺伝子診断が、有用 である。
- (9) 拡張相肥大型心筋症では、拡張相肥大型心筋症の左室壁厚については、減少するもの、肥大 を残すもの、非対称性中隔肥大を認めるものなど様々であるが、過去に肥大型心筋症の診断 根拠(心エコー所見など)があることが必要である。

【申請のための留意事項】

- 1 新規申請時には、12誘導心電図(図中にキャリブレーションまたはスケールが表示されていること)および心エコー図(実画像またはレポートのコピー)により診断に必要十分な所見が呈示されていること)の提出が必須である。
- 2 心エコー図で画像評価が十分に得られない場合は、左室造影やMRI、CT、心筋シンチグラフィなどでの代替も可とする。
- 3 新規申請に際しては、心筋炎や特定心筋疾患(二次性心筋疾患)との鑑別のために、心内膜下心筋生検を施行することが望ましい。また、冠動脈疾患の除外が必要な場合には冠動脈造影または 冠動脈CTが必須である。
- 4 新規・更新申請時は、下記の大項目を一つ以上満たすこととする。

大項目① 心不全や不整脈治療 (ICD 植込みなど) による入院歴を有する

大項目② 心不全の存在

心不全症状 NYHA II 度以上かつ [(推定 Mets 6以下) or (peak VO2<20)]

大項目③ 突然死もしくは心不全のハイリスク因子を一つ以上有する

- 1) 致死性不整脈の存在
- 2) 失神・心停止の既往
- 3)肥大型心筋症による突然死もしくは心不全の家族歴を有する
- 4) 運動負荷*に伴う血圧低下(血圧上昇 25mmHg 未満;対象は40歳未満)
- 5) 著明な左室肥大(最大壁厚≥30mm)
- 6) 左室流出路圧較差が 50mmHg を超える場合などの血行動態の高度の異常
- 7) 遺伝子診断で予後不良とされる変異を有する
- 8) 拡張相に移行した症例

*運動負荷を行う場合には危険を伴う症例もあるため注意を要する

本認定基準は、肥大型心筋症の診療に関するガイドライン(2007年改訂版 日本循環器学会)などをもとに作成している。診断技術の進歩とともに、認定基準が変更されることがある。

51 拘束型心筋症 臨床調査個人票 (1. 新規)

<u>ふりがな</u> 氏 名		性別	1. 男2. 女	生年 月日]治 2. 大正]和 4. 平成	1	年	月(満	日生歳)
住 所	郵便番号 電話 ()		出都道			発病時都道所			
発病 年月日	1. 昭和 年 月 日 礼		. 昭和 年 2. 平成 年	. 月	日	保険種別	-	2. 組 5. 国	3. 船 6. 高	
身体障害者 手帳	1. あり(等級級)2. なし 介護	養認定 1	. 要介護(要介	護度)	2. 要支援	3. なし			
生活状況	社会活動(1. 就労 2. 就学 3. 家事労任日常生活(1. 正常 2. やや不自由である						·助)))	
受 診 状 況 (最近6ヶ月)	1. 主に入院 2. 入院と通院半々 3	3. 主に通	院(/月)	4. 往記	多あり	5. 入通院 ケ	なし 6. そ	その他の	()
既 往 歴	□あり □1肥大型ご筋症 □2その他のご筋症 □6へモクロマトーシス □7好酸料能 □10放射線治療後 □11アレルギー性 □14特定薬剤使用・暴露歴 (*1) □15	症候群 疾患 □1	□8原虫寄生虫感	雑 口	9悪性新)	
家族歷	□なし (心疾患、突然死を中心に記載して下 □あり(さい)				患者との統 <mark>持</mark> 所	:)		
病型	□特発性 (病因不明) □ 2次性 既注歴 における該当番号 = □その他 (ugin.			
鑑別診断	1. 虚血性心疾患 2. 弁膜疾患、先天性心疾患 3. 高血圧性心疾患 4. 代謝・内分泌性心疾患 5. 肺性心 6. 貧血 7. 神経・筋疾患(筋ジストロフィーを含む)			□ で で で で で で で で で で で で で で で で で で で	きる。きる。きる。きる。	□できない □できない □できない □できない □できない □できない □できない				
発症経過	8. 中華生失患、崖崎熱 発記時期 □ 6ヶ月未満 □ 1年末満 □] 5年未満	□ 1 0年未満 □			□できない □発証制が明				:
現病歴	1. 初発症状 □息切れ□全身倦怠感□浮	1種口動悸	•失神 🗆 血栓塞	症口そ	の他()	口なし			
	2. 現在の症状 □息切れ □全身倦怠感 □沼	部 口動陸	・失神□血栓寒	綻□そ	の他(Y	口なし			
and contact	1. 身体所見	脈拍 なし Ⅲ 音]あり □な	/分 □あり□なし 〕 はし 肝腫大 □	呼吸 [V音 口 あ あり 口 :	(検査 回数 らり □な	日: 年 /分 に 乳腫 口あり口	月 Sp02		日) %	
検査所見	2. 胸部レントゲン所見 うっ血 口あり 口なし 胸水 口あり []なし 〃	心胸比 %	口その		日: 年	月)	目) 。	
	3. 心電図所見 洞鵬律 □あり □なし □低電位 心 心室期外収縮 □あり (Lown 伝導異常 □ I° □ II° □ III° □ SSS □ PQ時間 (msec) QRS時間 (異常収波 □あり □なし ST-T異常	度) 口な]右脚ブロッ msec)	は 心室頻拍 □ シク □左脚ブロッ QT時間 (]あり □ vク □心 msec	□あり]なし 室内(ご)	輝害				

	4. 心エコー図所見	**************************************		(検査日:	年 月	日)	
	検査場準(/分				
	左室内径 Dd mm Ds			6			
	左室壁厚 IVS mm PW	mm 左房径	mm h	大静脈径	mm		
	右室内径 RVD mm 心の						
	左室壁画紙下口あり 留位: 拡張能 E cm/sec A	ь. / В.Т) [がなし			
	がある。 cm/sec A	CM/Sec DCI	msec に たい /でtを羊	cm/sec 			
	日その他(口なし二大升圏加口の	めり VIIAE	ming) Live	, ,		
					,		
	5. 血液栓查(実施日 年	月 日)					
	WBC/mm ³	RBC×1	$0^{4}/m^{3}$	Hbg/dl	Ht	%	
	TPg/dl			AST IU/1	ΔΙ Τ	IU/1	
		-					
	ALPIU/1	LDHIU		CK IU/1	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	mg/dl	
	C r mg/dl	UA mg/		NamEg/		mEq/l	
	Cl mEq/1	BS mg/	/dl	CRPmg/dl	BNP	pg/ml	
検査所見	HCV抗体						
	6. CT 所見 心膜肥厚	□あり □なし		(検査日 :	年	月 日)	
	MRI 所見 心膜凹厚	□あり □なし		(検査日	: 年	月 日)	
	7 NIKHT THATCH			/4△★	on to	a r	7)
	7. 心臓カテーテル検査所見 (mg/kg/mg/mg/mg/mg/mg/mg/mg/mg/mg/mg/mg/mg/mg		/ (1570)		旧: 年	Я Г	1)
		mig)有到工	/ (EDP / (EDP)	明工 注答定 ****出い		
	ける	小好什哥 M/CI	/ (CUP /	/) ((mrg)		
	左至贵所見		<i>(</i>				
)	左室駅出分画	%		
	冠脈 贯		,		70		
	□正常□異常()				
	8. シンチグラム □施庁 (検査目	: 年 月	日, 日, 日;	未施行			
	壁動低下 □あり 佐室駅 その他異常所見(份画 %	口なし			`	
	ての他共市別先()	
	9. 心内膜下生検 病理所見 口正	常 口異常		(検査日:	年 月	月 月)	
	薬剤名と一日投与量を記載して			./. MA: LL: TE THE	(att D. A.		
	□ ジギタリス (薬品名 (用量)		血管拡張薬	(薬品名 (用量)
-	□ ACE阻害薬(薬品名			カテコラミン	(薬品名		
治療内容	(用量	,)			(用量		´)·
	□ AII 拮抗薬 (薬品名)		その他薬剤	(薬品名)
	(用量	aradina a			(用量)
	□ β遮断薬 (薬品名)		補助循環	()
	(用量	a san Asserta		Assimilar of the	12 (No. 10) (No. 10)		
医療上の問題点							
						[wron 3 4-7	- aut 1
F # 14 BB F # 11.	A Para Commence of the Commenc					【WISH 入力不	`安】
医療機関所在地				記載年月日	1969384 - 4. 		
医療機関名				平成	年	月	B
			印	TW	· T	Л	Н
医師の氏名							
医師の氏名	が悪化した場合のみ記載)				per tege		
医師の氏名 (軽快者の症状	が悪化した場合のみ記載) たことを医師が確認した年月日	NAME OF THE OWNER O	: <u>.</u>	~:: 平成	年 身	B	-
医師の氏名 (軽快者の症状 症状が悪化し			E	平成		FI FI	

留意事項:①原則として6ヵ月以内の資料に基づき記入すること。 ②心電図、心エコー図(実画像またはレポートのコピー。ただし、心エコー図での評価が十分に得られない場合には、CT、MRI、心筋

シンチグラフィ、左室造影などでの代替も可。)を添付すること。 ③可能であれば、その他画像検査、心筋生検所見のコピーも添付すること。

51 拘束型心筋症 臨床調査個人票

(2. 更新)

ふりがな		T								
氏 名		性別	3. 男4. 女	生年 月日		治 2. 大正 和 4. 平成		年(月 (満	日生 歳)
住 所	郵便番号 電話 ()		出都道			発病時 都道/			
発病 年月日	1. 昭和 年 月 日	初診 1	. 昭和 年	月	F	保険種別		2. 組 5. 国	3. 船 6. 高	M
身体障害者 手帳	1. あり(等級級)2. なし 介	護認定 1	要介護(要介	護度)	2. 要支援	3. なし			
初回認定 年月日	平成 年 月 日									
生活状況	社会活動(1.就労 2.就学 3.家事労 日常生活(1.正常 2.やや不自由でも						助)))	
受 診 状 況 (最近6ヶ月)	1. 主に入院 2. 入院と通院半々	3. 主に通	院(/月)	4. 往記	診あり	5. 入通院	よし 6.	その他	()
前回申請時 からの変化	□軽決 □不変 □徐々に悪化 □急速ご	悪化 口その	池()			
自覚症状の変化	□全身倦怠感 (□増強 □消腫 (□増強 □動悸・失神 (□増強 □血栓塞栓症 (□増強	□不変 □ □不変 □ □不変 □ □不変 □	軽決 □ない]軽決 □ない 軽決 □ない]軽決 □ない]軽決 □ない □軽決 □ない	ł						
	□あり (□なし 血圧 (/ mmHg) MYHA心機能分類 □ I □ IIs □ IIm □ III 2. 胸部レントゲン所見の変化 □あり (□なし 心胸比 % 3. 心電図所見の変化		/分 peakVO ₂ (ml/mi	(検:	査 日 : 4		月	日)	
検査所見	□あり (□なし 4. 心エコー図所見の変化 □ 検査時期律 (左室内径 Dd mm Ds mm) 心拍数 左室駅出 右室内径 sec DcT]あり 口な1	な /5. 漫画 RVD mm '. msec し	%	檢 cm/sec	荃 日:	Ē	月)	
	5. 血液検査(実施日 年 月 WBC/mm ³ TPg/dl AIP IU/1 Cr mg/dl Cl mEq/1 HOV抗体	RBC A1b LDH UA	×10 ⁴ /mm ³ g/dl IU/1 mg/dl mg/dl	AST_ CK Na	g/ I nE m	U/1 //1 g/	BUN	% IU, mg, nE	/1 /dl g/1	
							Name of the last o			

	薬剤名と一日投	与量を記載してく	ださい。			 -			****	
	□ ジギタリス	(薬品名)		血管拡張薬	(薬品	品名)
	,	(用量)		 	(用量	<u>.</u> L)
治療内容						 				
(口)尽了) 台	□ ACE阻害薬	(薬品名)		カテコラミン	(薬	品名)
		(用量)		 	(用:	鞤)
	□ AII 拮抗薬	(薬品名)		その他薬剤	(薬,	品名)
		(用量)			(用:	量)
	β 遮断薬	(薬品名)		補助循環	()
	(用	量)							
医療上の問題点	Ţ									
	######################################								【WISH入	力不要】
医療機関所在地	1									
						記載年月	日:			
医療機関名										
						並	成	年	月	日
医師の氏名					印					
(軽快者の症状	が悪化した場合の	のみ記載)				 			*****	
症状が悪化し	たことを医師が	確認した年月日				平成	年	月	目	
	者証交付年月日	- Washida atta				 平成	年	月	日	

留意事項:①原則として6ヵ月以内の資料に基づき記入すること。

②心電図、心エコー図(実画像またはレポートのコピー。ただし、心エコー図での評価が十分に得られない場合には、CT、MRI、心筋シンチグラフィ、左室造影などでの代替も可。)を添付すること。

2009-10-01

51. 拘束型心筋症

【基本病態】

左室拡張障害を主体とする ①硬い左室、②左室拡大や肥大の欠如、③正常または正常に近 い左室収縮能 ④原因不明 の4項目を特徴とする。左室収縮機能、壁厚が正常にもかかわ らずうっ血性心不全がある患者では本症を疑う。小児例と成人例では予後が異なることを留 意しなければならない。

【拘束型心筋症の診断基準】

拘束型心筋症の診断は、統合的に判断する必要があるが、①心拡大の欠如、②心肥大の 欠如、③正常に近い心機能、④硬い左室、所見が必須であり、⑤ほかの類似疾患との鑑 別診断 がされていることが必要である。

おのおのの条件を記載する。

- ①心拡大の欠如:心臓超音波検査、MRIなどによる左室内腔拡大の欠如
- ②心肥大の欠如:心臓超音波検査、MRIなどによる心室肥大の欠如
- ③正常に近い心機能:心臓超音波検査、左室造影、MRIなどによる正常に近い左室駆 出分画
- ④硬い左室:心臓超音波検査・右心カテーテル検査による左室拡張障害所見
- ⑤鑑別診断:肥大型心筋症・高血圧性心疾患・収縮性心膜炎などの除外診断 .鑑別診断するべき疾病は下記である。
 - 収縮性心膜炎
- ・虚血性心疾患の一部・高血圧性心疾患

- · 肥大型心筋症
- ·拡張型心筋症
- ・二次性心筋症

心アミロイドーシス グリコーゲン蓄積症

心サルコイドーシス 放射線心筋障害

心ヘモクロマトーシス 家族性神経筋疾患など

・心内膜心筋線維症など

さらに、認定には心不全症状があることが必要であるものとする。

【診断のための参考事項】

(1) 自覚症状

呼吸困難、浮腫、動悸、易疲労感、胸痛など。

(2) 他覚所見

頚静脈怒張、浮腫、肝腫大、腹水など。

(3) 聴診

Ⅲ音、収縮期雑音など。

(4) 心電図

心房細動、上室性期外収縮、低電位差、心房・心室肥大、非特異的ST-T異常、脚ブ ロックなど。

(5) 心エコー図

心拡大の欠如、正常に近い心機能、心肥大の欠如※。心房拡大、心腔内血栓など。

(6) 心臓カテーテル検査

冠動脈造影:有意な冠動脈狭窄を認めない。

左室造影:正常に近い左室駆出分画※2。

右心カテーテル検査: 左室拡張障害(右房圧上昇、左室拡張末期圧上昇、右室拡張末期 圧上昇、肺動脈楔入圧上昇、収縮性心膜炎様血行動態除外など)。

(7) MRI

左室拡大・肥大の欠如、心膜肥厚・癒着の欠如。

(8) 運動耐容能

最大酸素摂取量および嫌気性代謝閾値の低下を認める。

(9) 心内膜下心筋生検

特異的な所見はないが、心筋間質の線維化、心筋細胞肥大、心筋線維錯綜配列、心内膜 肥厚などを認める※。

(10) 家族歴

家族歴が認められることがある。

注釈

※1. 心エコー所見

項目

計測値

①心拡大の欠如

: 左室拡張末期径≤55mm 左室拡張末期径係数<18mm

②心肥大の欠如

心室中隔壁厚≦12mm

左室後壁厚≦12mm

③ドプラ検査 TMF: 偽正常化もしくは拘束型パターン

※病初期は呈さないことあり。

経僧帽弁血流および経三尖弁血流の呼吸性変動の評価

④心腔内血栓

⑤左房拡大

左房径>50mm、左房容積>140ml

※2. 心臓カテーテル検査:

項目

計測値

①正常に近い左室駆出分画 左室駆出分画≥50%

※3. 冠動脈造影(冠動脈 CT)・心内膜下生検は心筋炎や特定心筋疾患との鑑別のため施行され ることが望ましい。

【申請のための留意事項】

- 1 新規申請時には、12誘導心電図(図中にキャリブレーションまたはスケールが表示されてい ること) および心エコー図(実画像またはレポートのコピー。診断に必要十分な所見が呈示 されていること。)または心臓カテーテルの所見の提出が必須である。
- 2 心エコー図で画像評価が十分に得られない場合は、左室造影やMRI、CT、心筋シンチグラフ ィなどでの代替も可とする。
- 3 新規申請に際しては、心筋炎や特定心筋疾患(二次性心筋疾患)との鑑別のために、心内膜 下心筋生検が施行されることが望ましい。また、冠動脈造影または冠動脈CTは、冠動脈疾患 の除外が必要な場合には必須である。
- 4 新規・更新申請時は、NYHAII度以上、運動耐容能のpeak VO, 20 ml/min/kg未満など、心不 全の存在を必要とする。

Increased myocardial NAD(P)H oxidase-derived superoxide causes the exacerbation of postinfarct heart failure in type 2 diabetes

Shouji Matsushima, Shintaro Kinugawa, Takashi Yokota, Naoki Inoue, Yukihiro Ohta, Sanae Hamaguchi, and Hiroyuki Tsutsui

Department of Cardiovascular Medicine, Hokkaido University Graduate School of Medicine, Sapporo, Japan Submitted 24 December 2008; accepted in final form 21 May 2009

Matsushima S, Kinugawa S, Yokota T, Inoue N, Ohta Y, Hamaguchi S, Tsutsui H. Increased myocardial NAD(P)H oxidase-derived superoxide causes the exacerbation of postinfarct heart failure in type 2 diabetes. Am J Physiol Heart Circ Physiol 297: H409-H416, 2009. First published May 22, 2009; doi:10.1152/ajpheart.01332.2008.—Type 2 diabetes adversely affects the outcomes in patients with myocardial infarction (MI), which is associated with the development of left ventricular (LV) failure. NAD(P)H oxidase-derived superoxide (O₂⁻) production is increased in type 2 diabetes. However, its pathophysiological significance in advanced post-MI LV failure associated with type 2 diabetes remains unestablished. We thus hypothesized that an inhibitor of NAD(P)H oxidase activation, apocynin, could attenuate the exacerbated LV failure after MI in high-fat diet (HFD)-induced obese mice with type 2 diabetes. Male C57BL/6J mice were fed on either HFD or normal diet (ND) for 8 wk. At 4 wk of feeding, MI was created in mice by ligating the left coronary artery. HFD-fed MI mice were treated with either 10 mmol/l apocynin or vehicle. HFD + MI had significantly greater LV end-diastolic diameter (LVEDD; 5.7 ± 0.1 vs. 5.3 ± 0.2 mm), end-diastolic pressure (12 \pm 2 vs. 8 \pm 1 mmHg), and lung weight/tibial length (10.1 \pm 0.3 vs. 8.7 \pm 0.7 mg/mm) than ND + MI, which was accompanied by an increased interstitial fibrosis of noninfarcted LV. Treatment of HFD + MI with apocynin significantly decreased LVEDD (5.4 ± 0.1 mm), LV end-diastolic pressure (9.7 ± 0.8 mmHg), lung weight/tibial length (9.0 \pm 0.3 mg/mm), and concomitantly interstitial fibrosis of noninfarcted LV to the ND + MI level without affecting body weight, glucose metabolism, and infarct size. NAD(P)H oxidase activity and O2 production were increased in noninfarcted LV tissues from HFD + MI, both of which were attenuated by apocynin to the ND + MI level. Type 2 diabetes was associated with the exacerbation of LV failure after MI via increasing NAD(P)H oxidase-derived O₂, which may be a novel important therapeutic target in advanced heart failure with diabetes.

diabetes; heart failure; remodeling; antioxidants; free radicals

TYPE 2 DIABETES is a major risk factor for the development of atherosclerotic disease and is greatly associated with ischemic heart disease. Previous clinical studies have shown that patients with diabetes have a worse outcome after myocardial infarction (MI) than patients without diabetes despite similar left ventricular (LV) ejection fractions and coronary patency rates (13, 15). The worse outcome in patients with diabetes has been associated with the development of heart failure (HF) (1, 39, 44). Furthermore, diabetes has been also known to directly affect myocardial structure and function independently on coronary artery disease (3, 8, 30).

Address for reprint requests and other correspondence: S. Kinugawa, Dept. of Cardiovascular Medicine, Hokkaido Univ. Graduate School of Medicine, Kita-15, Nishi-7, Kita-ku, Sapporo 060-8638, Japan (e-mail address: tuckahoe @med.hokudai.ac.jp).

Previous studies on our own (35) and Smith et al. (37) have demonstrated that hyperglycemia induced by streptozotocin per se exaggerates LV remodeling and failure after MI. However, streptozotocin induces diabetes in rodents by chemical destruction of insulin-producing β -cells of the pancreatic islets, which thus models type 1 diabetes (previously termed juvenileonset diabetes) resulted from an auto immune-mediated loss of B-cell mass during childhood (4). In contrast, type 2 diabetes usually occurs later in life and is typically preceded by obesity and associated metabolic abnormalities such as insulin resistance and dyslipidemia. Type 2 diabetes can be modeled by feeding a high-fat diet (HFD) in mice (25). A HFD leads to insulin resistance, impaired glucose control, an increase in body fat and dyslipidemia, and eventually fasting hyperglycemia. Despite the growth of diabetes associated with obesity in worldwide populations, the effects of type 2 diabetes on LV failure after MI have not been examined.

Previous studies have shown that the production of reactive oxygen species (ROS) is increased in post-MI remodeling and failure, and pharmacological and genetic interventions to scavenge ROS can ameliorate this disease process (23, 24, 36). Importantly, the activation of NAD(P)H oxidase has been reported to enhance oxidative stress and play an important role in the progression of diabetic complications (2, 9, 11, 14, 33). Based on these results, NAD(P)H oxidase-derived ROS are postulated to be involved also in the exacerbation of LV remodeling and failure after MI associated with type 2 diabetes.

The purpose of the present study was to determine whether HFD-induced diabetes mellitus, a model of type 2 diabetes, might exacerbate LV remodeling and failure after MI in mice. Furthermore, we determined whether the treatment of HFD-fed mice with apocynin, an inhibitor of NAD(P)H oxidase activation, could attenuate this process after MI. Apocynin has been shown to prevent the binding of the cytosolic subunits of the NAD(P)H oxidase to the membrane-bound p22^{phox}/nox subunits, preventing oxidase activation and subsequent production of superoxide (O_2^-) (28) and can be used safely and effectively in in vivo experiments (19).

METHODS

Experimental design. All procedures and animal care were approved by our institutional animal research committee and conformed to the animal care guideline for the Care and Use of Laboratory Animals in Hokkaido University Graduate School of Medicine.

The outline of experimental design is shown in Fig. 1. Male C57BL/6J mice (8 wk of age) were fed on either a normal diet (ND; CE-2; CLEA Japan) containing 4.2% fat and 54.6% carbohydrate or HFD (HFD32; CLEA Japan) containing 32% fat and 29.4% carbohydrate for 8 wk. After 4 wk, MI was created in ND-fed (ND + MI group; n = 30) and HFD-fed (HFD + MI group; n = 68) mice by

http://www.ajpheart.org

0363-6135/09 \$8.00 Copyright © 2009 the American Physiological Society

H409

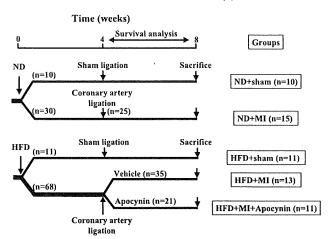


Fig. 1. Experimental protocol. The no. in parentheses indicates the no. of mice. ND, normal diet; MI, myocardial infarction; HFD, high-fat diet.

ligating the left coronary artery as we previously described (23, 24, 34-36). Sham operation without ligating the coronary artery was also performed in ND-fed (ND + sham group; n = 10) and HFD-fed (HFD + sham group; n = 11) mice. All mice were observed and analyzed for an additional 4 wk with the exception of mice that died within 6 h after surgery for induction of MI (5 ND-fed mice and 12 HFD-fed mice). To examine the role of the activation of NAD(P)H oxidase in the HFD + MI group, they were further divided to be treated with 10 mmol/l apocynin (HFD + MI + apocynin group; n =21) in drinking water or to receive vehicle (HFD + MI group; n =35). The concentration of apocynin or length of treatment in the present study was chosen on the basis of the previous study, in which it was confirmed to be effective in in vivo experiments (19). Therefore, the experiment was performed by the following five groups: ND + sham (n = 10), ND + MI (n = 25), HFD + sham (n = 11),HFD + MI (n = 35), and HFD + MI + apocynin (n = 21) (Fig. 1).

Our preliminary experiments confirmed that glucose tolerance was abnormal after HFD feeding for 4 wk by intraperitoneal glucose loading (1 mg/g body wt) in PBS.

Survival. The survival analysis was performed in all groups of mice. During the study period of 4 wk after surgery, cages were inspected daily for deceased animals. No mice with sham operation died. All deceased mice were examined for the presence of MI as well as pleural effusion and cardiac rupture.

After surgery (4 wk), echocardiographic studies were performed, and the measurement of hemodynamics followed. After that, blood samples were collected, mice were killed, and organ weight was measured. These were performed in all surviving mice (n = 10 for ND + sham, n = 15 for ND + MI, n = 11 for HFD + sham, n = 13 for HFD + MI, and <math>n = 11 for HFD + MI + apocynin). The surviving mice were further divided into the following two groups; those for the histological analysis, including infarct size, myocyte cross-sectional area, collagen volume fraction, and terminal deoxynucleotidyl transferase-mediated dUTP nick end-labeling (TUNEL) staining (n = 6 for each), and those for the biochemical assay, including O_2 production, thiobarbituric acid reactive substances (TBARS), and NAD(P)H oxidase activity (n = 4 for ND + sham, n = 9 for ND + MI, n = 5 for HFD + sham, n = 7 for HFD + MI, and <math>n = 5 for HFD + MI + apocynin).

Blood glucose and plasma biochemical measurement. After the mice fasted for 6 h, blood samples were collected from the inferior vena cava before death, blood glucose level was determined using a glucometer (Glutest Ace R; Sanwa Kagaku Kenkyusho), and plasma insulin was measured by an enzyme-linked immunosorbent assay kit (Morinaga Institute of Biochemical Science). Homeostatic model

assessment of insulin resistance index was calculated as the product of fasting blood glucose (mg/dl), fasting plasma insulin (ng/ml), and a constant (1/22.5). Total cholesterol, triglyceride, and nonesterified fatty acid (NEFA) were measured by using enzymatic assays using the Cholesterol E-test, Triglyceride E-test, and NEFA C-test, respectively (Wako Pure Chemical Industries).

Echocardiographic and hemodynamic measurements. Echocardiographic studies and hemodynamic measurements were performed under light anesthesia with tribromoethanol/amylene hydrate (avertin; 2.5% wt/vol, 8 µl/g ip) with known short duration of action and modest cardiodepressive effects (20). Two-dimensional parasternal short-axis views were obtained at the levels of the papillary muscles. In general, the best views obtained with the transducer lightly applied to the mid upper left anterior chest wall. The transducer was then gently moved cephalad or caudad and angulated until desirable images were obtained. After it had been ensured that the imaging was on axis, two-dimensional targeted M-mode tracings were recorded at a paper speed of 50 mm/s. A 1.4-Fr micromanometer-tipped catheter (Millar Instruments) was inserted in the right carotid artery and then advanced to the left ventricle to measure LV pressures. One subset of investigators, who were not informed of the experimental groups, performed in vivo LV function studies.

Tissue preparation, myocardial histopathology, and determination of infarct size. After death, the heart was excised and dissected into right ventricle (RV) and LV including septum. LV was cut into three transverse sections; apex, middle ring, and base. From the middle ring, 5-µm sections were cut and stained with Masson's trichrome. Myocyte cross-sectional area and collagen volume fraction were determined by quantitative morphometry of tissue sections from the mid-LV as we described previously (23, 24, 34–36).

The circumference length of infarcted myocardium was measured along the endo- and epicardial surfaces from each of the cardiac sections, and the values from all specimens were summed. Infarct size (in %) was calculated as total infarct circumference length divided by total cardiac circumference length (23, 24, 34–36).

Because the survival rate up to 4 wk tended to be lower in HFD + MI mice than ND + MI and HFD + MI + apocynin mice, the infarct size was measured also after 24 h when most animals are still alive. A separate group of animals was created by ligating the left coronary artery according to the same methods described above. After 24 h of coronary artery ligation, Evans blue dye (1%) was perfused in the aorta, and coronary arteries and tissue sections were then incubated with a 1.5% triphenyltetrazolium chloride solution. The infarct area (pale), the area at risk (not blue), and the total LV area from each section were measured (24, 36).

Myocardial apoptosis. To detect apoptosis, tissue sections from the mid-LV were stained with TUNEL staining. The number of TUNEL-positive cardiac myocyte nuclei was counted, and the data were normalized per 10⁵ total nuclei identified by hematoxylin-positive staining in the noninfarcted LV (24, 36).

Myocardial O_2^- production and lipid peroxidation. LV myocardial tissues with MI were carefully dissected into the following three parts: the infarcted LV, the border zone LV with the perinfarct rim (a 1-mm rim of normal-appearing tissue), the remaining noninfarcted LV. The chemiluminescence elicited by O_2^- in the presence of lucigenin (5 μ mol/l) was measured in noninfarcted LV tissues from all groups of mice using a luminometer (AccuFLEX Lumi 400; ALOKA, Tokyo, Japan), as described previously (27). To validate that the measured chemiluminescence signals are indeed derived from O_2^- , the experiments were performed in the presence of 20 mmol/l Tiron, a cell-permeant, nonenzymatic scavenger of O_2^- . The chemiluminescence signals were expressed as counts per minute per milligram of dry tissue weight (relative light unit·mg $^{-1}$ ·min $^{-1}$).

The degree of lipid peroxidation, a major biochemical consequence of ROS attack on biological tissue, was determined in the

AJP-Heart Circ Physiol • VOI. 297 • JULY 2009 • www.ajpheart.org

noninfarcted LV tissues through biochemical assay of thiobarbituric acid reactive substances (TBARS), as previously described (17, 24). The values of TBARS were expressed as micromoles per gram wet weight.

Myocardial NAD(P)H oxidase activity. NAD(P)H oxidase activity in homogenates of noninfarcted LV tissues was measured by the lucigenin assay after addition of 3×10^{-4} mol/l NADPH (40). Protein content was measured in an aliquot of the homogenate by the Lowry method. Some experiments were performed in the presence of Tiron (20 mmol/l).

Statistical analysis. Data are expressed as means \pm SE. Survival analysis was performed by the Kaplan-Meier method, and between-group difference in survival was tested by the log rank test. Between-group comparison of means was performed by one-way ANOVA, followed by *t*-tests. The Bonferroni's correction was done for multiple comparisons of means. P < 0.05 was considered to be statistically significant.

RESULTS

Survival after MI. Early operative mortality (within 6 h) after induction of MI was comparable between ND-fed and HFD-fed mice [5/30 (16.7%) vs. 12/68 (17.6%), P= not significant]. The survival rate up to 4 wk tended to be lower in HFD + MI (37.1%) compared with ND + MI (60.0%) and higher in HFD + MI + apocynin (52.4%) compared with HFD + MI but did not reach statistical significance.

Animal characteristics. After 8 wk of feeding, body weight and fat weight/tibial length were significantly higher in HFD-fed than in ND-fed mice (Table 1). HFD-fed mice developed hyperglycemia, hyperinsulinemia, and hyperlipidemia (Table 1). These data revealed that HFD-fed mice have the similar phenotype characteristic for type 2 diabetes. Furthermore, the induction of MI and the administration of apocynin did not affect these characteristics (Table 1).

Echocardiography and hemodynamics. The echocardiographic and hemodynamic data of surviving mice at 4 wk after surgery are shown in Fig. 2 and Table 2. There were no differences in all parameters between ND + sham and HFD + sham mice. LV diameters were significantly greater, and LV fractional shortening was significantly lower in ND + MI than in ND + sham. These changes were further deteriorated in HFD + MI, and apocynin ameliorated them to the level of ND + MI.

There was no significant difference in heart rate and mean aortic pressure among any groups of mice. LV end-diastolic pressure (EDP) was significantly increased, and LV +dP/dt and LV -dP/dt were significantly decreased in ND + MI

compared with ND + sham. These were further deteriorated in HFD + MI, and apocynin ameliorated these changes to the level of ND + MI.

In addition, we studied the ND + MI + apocynin group as a control for the HFD + MI + apocynin group. There were no significant differences in echocardiographic and hemodynamic data between ND + MI and ND + MI + apocynin (LV end-diastolic dimension, 5.3 ± 0.2 vs. 5.3 ± 0.1 mm; LV end-systolic dimension, 4.4 ± 0.2 vs. 4.5 ± 0.1 mm; fractional shortening, 17.2 ± 0.6 vs. $16.2 \pm 0.2\%$; LVEDP, 8.0 ± 1.4 vs. 9.2 ± 1.1 mmHg; LV +dP/dt, $6,449 \pm 463$ vs. $6,278 \pm 509$ mmHg/s; LV -dP/dt, $5,375 \pm 376$ vs. $5,473 \pm 245$ mmHg/s).

Organ weights. There were no differences in LV weight/tibial length, RV weight/tibial length, and lung weight/tibial length between ND + sham and HFD + sham mice (Fig. 3). They were increased in ND + MI compared with ND + sham mice (Fig. 3). LV and lung weight/tibial length were further increased in HFD + MI, which were decreased in HFD + MI + apocynin to the level of ND + MI mice (Fig. 3, A and C). The changes of lung weight/tibial length were consistent with those of LVEDP. Furthermore, the prevalence of pleural effusion was also greater in HFD + MI than ND + MI (33 vs. 46%, P < 0.05), which was attenuated in HFD + MI + apocynin (36%, P < 0.05 vs. HFD + MI) to the level of ND + MI.

Infarct size. Infarct size determined by the morphometric analysis 4 wk after coronary artery ligation was comparable $(55 \pm 1, 55 \pm 1, \text{ and } 54 \pm 2\%; P = 0.61)$ among ND + MI, HFD + MI, and HFD + MI + apocynin groups (n = 6 each). To confirm that HFD did not alter infarct size at an early phase of MI, both the area at risk and infarct area were measured in separate groups of mice 24 h after coronary artery ligation. Percentages of LV at risk (risk area/LV: 52 ± 2 , 51 ± 2 , and $51 \pm 2\%$; P = 0.82) and infarct size (infarct/risk area: 79 ± 1 , 78 ± 1 , and $78 \pm 1\%$; P = 0.43) were also comparable among three groups of ND + MI, HFD + MI, and HFD + MI + apocynin mice (n = 4 each).

Histomorphometry. Histomorphometric analysis of noninfarcted LV sections showed that myocyte cross-sectional area was increased in three groups of MI compared with two groups of sham. However, it did not alter between two groups of sham or among three groups of MI (Fig. 4, A and B). Collagen volume fraction was increased in ND + MI compared with ND + sham mice, further increased in HFD + MI (Fig. 4, A and C), and was decreased in HFD + MI + apocynin to the level of ND + MI mice (Fig. 4, A and C). There was no

Table 1. Animal characteristics

The State of Contract of Contr		The state of the s	2.5.12.,		
27 (N.). (18.) 2 (N.). (18.)	ND + Sham	ND + MI	HFD + Sham	HFD + MI	HFD + MI + Apocynin
n	10	15	11	13	4.220 [1] \$18.20
Body wt, g	25.3 ± 0.4	25.2 ± 0.7	32.5±1.0*†	$32.1\pm0.8*\dagger$	$32.9\pm0.4*\dagger$
Fat wt/TL, mg/mm	28.4 ± 2.2	15.0 ± 1.6	95.1±9.4*†	89.8±9.8*†	83.5±8.5*†
FBS, mg/dl	101±7	105±8	177±9*†	173±6*†	159±5*†
Insulin, ng/ml‡	0.26 ± 0.01	0.27 ± 0.04	$0.49 \pm 0.14 * \dagger$	$0.52 \pm 0.06 * \dagger$	$0.41 \pm 0.06*†$
HOMA index‡	1.0 ± 0.1	1.3 ± 0.3	4.2±0.4*†	4.0±0.5*†	2.9±0.4*†
Total cholesterol, mg/dl‡	87±6	72±5	158±24*†	132±13*†	133±8*†
Triglyceride, mg/dl‡	61±5	71±3	90±5	81±18	87±5
Free fatty acid, meq/l‡	0.82 ± 0.05	0.77±0.06	0.91±0.11	0.85 ± 0.07	0.77 ± 0.08

Values are means \pm SE; n, no. of mice; $\pm n = 8$. ND, normal diet; HFD, high-fat diet; MI, myocardial infarction; TL, tibial length; FBS, fasting blood glucose. P < 0.05 vs. ND + sham (*) and ND + MI (†).

AJP-Heart Circ Physiol • VOI. 297 • JULY 2009 • www.ajpheart.org

Fig. 2. Representative M-mode echocardiograms obtained from 5 groups of mice. AW, anterior wall; PW, posterior wall; EDD, enddiastolic diameter.

significant difference in this parameter between ND + sham and HFD + sham (Fig. 4, A and C).

Myocardial apoptosis. There were rare TUNEL-positive nuclei in both ND + sham and HFD + sham. The number of TUNEL-positive myocytes in the noninfarcted LV was not altered between ND + MI and HFD + MI (76 \pm 14 vs. 77 \pm 5/10⁵ nuclei; P = 0.89).

Myocardial O_2^- production and TBARS. O_2^- production and TBARS were increased in noninfarcted LV tissues from ND + MI compared with ND + sham mice, and further increased in those from HFD + MI (Fig. 5, A and B). They were decreased in HFD + MI + apocynin to the level of ND + MI mice. They did not differ between ND + sham and HFD + sham mice.

Myocardial NAD(P)h oxidase activity. To determine the roles of NAD(P)H oxidase on O_2^- production, we measured the NAD(P)H oxidase activity in noninfarcted LV tissues. In contrast to O_2^- production, NAD(P)H oxidase activity was not increased in ND + MI and was increased in HFD + sham compared with ND + sham (Fig. 5C). It was significantly higher in HFD + MI than ND + MI, which was inhibited by apocynin to the level of ND + sham and ND + MI (Fig. 5C).

DISCUSSION

The present study demonstrated that HFD-induced type 2 diabetes exacerbated LV remodeling and failure after MI, accompanied by the increased interstitial fibrosis of noninfarcted myocardium. The administration of apocynin ameliorated this exacerbation by decreasing ROS production via NAD(P)H oxidase. Therefore, the present study provides the first direct evidence that NAD(P)H oxidase-dependent myocardial oxidative stress in type 2 diabetes exacerbates LV remodeling and failure after MI.

One of the important findings of the present study was that HFD induced type 2 diabetes characterized by insulin resistance and obesity in mice (Table 1) and exacerbated LV remodeling and failure after MI (Table 2 and Fig. 2). Similar to the present study, streptozotocin-induced hyperglycemia exacerbated LV remodeling and failure after experimental MI (35, 37). Moreover, the present study is consistent with the previous study in Goto Kakizaki rats, a nonobese type 2 diabetes model, in which the progression of HF was accelerated after MI (6). Therefore, the present study builds on these past reports by demonstrating that either type 1 or type 2 diabetes exaggerated post-MI LV failure. These experi-

Table 2. Echocardiography and hemodynamics

or of Marie and	ND + Sham ND + MI		HFD + Sham	HFD + MI	HFD + MI + Apocynin
n · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	10	15	11	13	11
Echocardiography					
LVEDD, mm	3.5 ± 0.1	5.3±0.2*	3.5±0.1†	$5.7 \pm 0.1* † ‡$	$5.4 \pm 0.1 * \pm 8$
LVESD, mm	2.3 ± 0.1	$4.4 \pm 0.2 *$	$2.2 \pm 0.1 \dagger$	5.1±0.1*†‡	$4.5 \pm 0.1 * \pm 8$
FS, %	35.4 ± 1.1	$17.2 \pm 0.6 *$	35.5±1.3†	$10.7 \pm 0.8 * † \pm$	16.0±0.7*‡§
AWT, mm	0.74 ± 0.02	$0.34 \pm 0.03*$	$0.73 \pm 0.03 \dagger$	$0.30\pm0.02*$ ‡	$0.30\pm0.01*\pm$
PWT, mm	0.75 ± 0.02	$0.98 \pm 0.03 *$	$0.76 \pm 0.02 \dagger$	$1.05\pm0.02*$ ‡	$1.00\pm0.03*$
Hemodynamics				·	
Heart rate, min-1	464±12	473 ± 10	476±10	466±12	471 ± 11
Means AoP, mmHg	77±2	76±2	77±2	74±3	76±1
LVEDP, mmHg	1.9 ± 0.3	$8.0 \pm 1.4 *$	$1.3 \pm 0.3 \dagger$	$12.3 \pm 1.7 * \ddagger$	9.7±0.8*±§
LV $+dP/dt$, mmHg/s	9,274±701	6,449±463*	8,911±650†	5,423±318*‡	5,991±190*‡
LV $-dP/dt$, mmHg/s	6,766±261	5,375±376*	7.106±457†	4,187±323*‡	5.328±200*‡
1	7.5±0.3	8.2±0.2	7.2 ± 0.5	8.9±0.3*‡	8.3 ± 0.1

Values are means \pm SE; n, no. of mice. LVEDD, left ventricular end-diastolic diameter; LVESD, left ventricular end-systolic diameter; FS, fractional shortening; AWT, anterior wall thickness; PWT, posterior wall thickness; AoP, aortic pressure; LVEDP, left ventricular end-diastolic pressure; LV, veft ventricular; τ , the time needed for relaxation of 50% maximal LV pressure to baseline value; ND, normal diet; HFD, high fat diet; MI, myocardial infarction. P < 0.05 vs. ND + sham (*), ND + MI (†), HFD + sham (‡), and HFD + MI (§).

AJP-Heart Circ Physiol • VOI. 297 • JULY 2009 • www.ajpheart.org